

彙 報

本会記事

西南アジア研究会総会

2020年度総会は2020年12月12日土曜日午後2時よりオンラインで開催された。

前川和也会長の挨拶に続き、春田晴郎氏を議長として選出、議事に入った。稲葉穰編集員より会誌発行状況が、磯貝健一編集委員より会員数、会計等の会務報告がなされた。ついで、会計業務について堀川徹監事より適切に処理されている旨報告された。その後、新年度予算について審議され承認された。また会誌のバックナンバー京都大学学術情報リポジトリにて公開することについても承認がなされた。

総会終了後、谷口淳一京都女子大学教授による講演「イブン・ジャマアの教育論——マムルーク朝時代初期の教師と学生——」（司会・講師紹介：磯貝健一氏）が行われた。

ご投稿のお願い

より充実した会誌をお届けできますよう、会員の皆様の活発なご投稿をお待ちしております。論文、研究ノート、書評のみならず、研究動向、学会動向その他、学術研究上有益な情報もお寄せいただきますようお願いいたします。なお、ご投稿いただいた原稿については編集委員会が委嘱する委員による査読が行われます。

『西南アジア研究』投稿規程

I 投稿先 西南アジア研究会 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部内

II 原稿

- 1 原稿は横書きとし、同じ内容の電子ファイルを使用ソフト名明記の上添付すること。ただし手書きの場合は、200字詰原稿用紙に横書きとする。
- 2 論文は注を含め400字詰原稿用紙60枚程度、研究ノート・研究動向は30枚程度を上限とする。
- 3 論文等すべて1号限りで完結するものとし、連載はしない。
- 4 採否は編集委員会が決定し、手直しを求めることもある。
- 5 原稿は返却しない。ただし図については、投稿時に申し入れがあれば返却する。
- 6 投稿者は本誌の体裁にしたがい、以下の書き方に統一すること。
 - a. 第1頁に表題・氏名、第2頁にその英訳、第3頁以下を本文とし、注・文献表を含めて通し頁をうつ。

- b. 章はローマ数字、節はアラビア数字（算用数字）で示す。ただし章節の表題の有無は自由である。
- c. 注は別紙おこしとし、本文の後ろにつける。注の書き方は次のとおりとする。
- 1) この場合、帝王の叙任は……
どちらともいえない。
- d. 出典と引用頁のみの注記は本文中にする。参考文献を [Fussman 1978: 94-98], あるいは [HS: 25] として本文中の当該箇所末尾に入れる。なお 94-98, 25 などは引用頁である。
- e. d. によって生じる文献表をつくり、別紙おこしで注の後ろにつける。筆者姓 ABC 順とし、欧文、和文、中文を混記する。中文は拼音による。書式は、下の IV のとおり。
- f. 雑誌などの略号は本誌の表紙うらの方式にしたがうこと。単行本・雑誌は、欧文ではイタリック指示、和・中文では『 』に入れ、論文表題は括弧をつけず、裸のままにする。巻数は算用数字とし、号数は () に入れて、3(1), 4(3-4) [3, 4号合併号の場合] などとする。Vol., Part などの表示はしない。なおロシア文字はイタリックを用いない。
- 7 以上により、文字原稿は、表題・氏名、英文表題・氏名、本文・注、文献表より成る。ただし採用決定後さらに英文要旨（300 語程度）の提出を求める。

III 図の原稿

- 1 本誌ではアート紙・折り込み図表は使わない。
- 2 したがって版面 13 × 20 cm を考慮すること。
- 3 図はそれぞれ別紙に作成し、通し番号をつけ、各図の天地を明確にすること。
- 4 たとえば図 3 などが複数の写真などで構成される場合は、版面に入るよう考慮のうえ、出来上り図を作成すること。個々の図は、図 1 からの通し番号とする。
- 5 図の説明文（キャプション）は図に記入せず、B5 版 200 字詰原稿用紙に書き、他の文字原稿の末尾につけておくこと。
- 6 本文原稿に図の挿入箇所を明示すること。原稿頁の右下に「図 2 挿入」などと朱書し、出来上りの面積（ 5×8 cm）、頁における位置（上下左右など）を指示すること。
- 7 そのままで版下になる図をつくること。場合によっては、別途に経費を申しうけることがある。

IV 原稿の権利

- 1 『西南アジア研究』に掲載される論文等について、その著者は複製権および公衆送信権に関する許諾を西南アジア研究会に与えたものとする。西南アジア研究会はこの許諾に基づき、公開用サーバに電子化した複製物を格納し、当該複製物を公衆の求めに応じて自動的に送信することができる。
- 2 図版、写真などを掲載する場合、投稿者の責任において、あらかじめそれら図版、写真の所蔵者、著作権者から許諾を受けるものとする

V 文献表の書き方

参考文献

IB:

DAI: (引用した資料の略号、および表紙裏に記載していない雑誌などの略号をアルファ

GAR: ベット順に配列し、コロンに続いてフルタイトル表記)

Tr. Id.:

Ackemann, H. Ch. (1975) *Narrative Stone Reliefs from Gandhara in the Victoria and Albert*

- Museum in London: Catalogue and Attempt at a Stylistic History.* Rome.
- Allchin, F. R. (1968) Archaeology and the Date of Kanishka: The Taxila Evidence. In: Basham, A. L. (ed) *Papers on the Date of Kanishka*. Leiden, 4 - 34.
- Bühler, G. (1894) The Bhattiprolu Inscriptions. *Epigraphia Indica* 2, 323 - 329.
- Burgess, J. (1970) *The Buddhist Stūpas of Amaravati and Jaggayyapeta in the Krishna District, Madras Presidency, Surveyed in 1882* (rep ed). Varanasi.
- Errington, E. (1987) Takhal: The Nineteenth-Century Record of Two Lost Gandhara Sites. *BSOAS* 50(2), 301 - 324.
- Gelder, J. M. van (tr) (1963) *Mānava Śrautasūtra Belonging to the Maitrāyaṇī Samhitā* (1985 rep ed). Varanasi.
- Kurita, I. (1988) *Gandharan Art I: The Buddha's Life Story. Ancient Buddhist Art Series I - II*. Tokyo.
- Kuwayama, Sh. (1994) The Horizon of Begram III and Beyond: A Chronological Interpretation of the Evidence for Monuments in the Kapiśi-Kabul-Ghazni Region. *EW* 41 (1 - 4), 79 - 120.
- Le Berre, M. & D. Schlumberger (1964) Observations sur les remparts de Bactres. *Monuments pré-Islamique d'Afghanistan*. *MDAFA* 19, 61 - 105.
- Marshall, J. (1914) Sha-ji-ki-Dheri. *Annual Report of the Director-General of Archaeology, Archaeological Survey of India 1, 1911 - 12*. Calcutta, 11.
- Marshall, J. (1918) *A Guide to Taxila*. Calcutta.
- Marshall, J. (1936) *A Guide to Taxila* (3rd ed). Delhi.
- Marshall, J. (1951) *Taxila: An Illustrated Account Archaeological Excavations I - III*. Cambridge.
- Marshall, J., A. Foucher & N. G. Majumdar (1940) *The Monument of Sāñchi I - III*. Delhi.
- 安藤志朗 (1985) ティムール朝 Shāh Rukh 麾下の中核 amir 『東洋史研究』 43(4), 4 - 11.
- 桑山正進 (1987) 『大唐西域記』(訳注)(『大乘佛典』中國篇 9) 林檎社.
- 佐藤 長 (1979) 『チベット歴史地理研究』岩波書店.
- 曾 問吾 (野見山温訳)(1945) 『支那西域経緯史』上 東光書林.
- 田原 正 (1978) 六朝建築の設計規準 山本五郎(編)『中國科學史研究』平凡社, 39-66.